

【翻訳】 英雄叙事詩「マナス」の特色

アディル・ジュマトゥルディ 著
西脇隆夫 訳

訳者まえがき

この訳文は、中国キルギス族の学者アディル・ジュマトゥルディ（阿地里・居瑪吐爾地）氏の『《瑪納斯》史詩的口頭特徴』（米尼克・希珀，尹虎彬主編『中国少数民族文化中的史詩与英雄』（広西師範大学出版社 2004年 363～394頁所収）を訳出したものである。なお、この論文は雑誌「西域研究」2003年第2期に掲載され、後に同氏の著書『口頭伝統与英雄史詩』（中央民族大学出版社 2009年）にも収められている。

本文でも言及されているように、近年、中国では社会科学院民族文学研究所の研究者たちを中心に、いわゆる「パリ・ロード理論」をもとにした叙事詩研究が盛んに進められ、多くの著書や論文を發表されている。この論文もそのような研究の一環としてキルギス族の英雄叙事詩「マナス」の語りについて考察したものである。

著者のアディル・ジュマトゥルディ氏については、かつて同氏の論文を訳出した『『マナス』の語り手ジュズプ・ママイ（上）』（『名古屋学院大学論集（人文・自然科学編）』Vol. 36 No. 1）においてその略歴を紹介したことがある。当時、著者は新疆ウイグル自治区文聯の副主席を務めていたが、その後北京の中国社会科学院の研究員（教授）になり、この数年は精力的に

多数の著書と論文を發表し、現在の中国では「マナス」研究の第一人者と言っても過言ではないだろう。

キルギス族の口頭伝承には、散文形式の英雄叙事詩（jomok）、部落系譜（sanjira）、古い儀式歌謡（aytidar）、哭歌（koshok）、恋歌（süyüü ir）、生活歌謡（turumux ir）、童謡（baldal ir）、諺（makal—lakap）と、散文形式の神話（apsana）、伝説（ulamish）、物語（jöö jomok）、謎（tabishmak）、笑話（shakaba）などがある。その中で、英雄叙事詩「マナス」の語りは千年以上も前に遡ることができ、それはキルギス族の口承文学の伝承において最も古く古典的な部分なのである¹⁾。

当代で最も著名なキルギスの作家チングス・アイトマートフ（欽吉斯・艾特瑪托夫 Chingiz Aytmatov）はキルギスの精神文化の特色、特にキルギスの口頭詩歌に対して、次のように指摘している²⁾。

「もしも他の民族がその過去の文化と歴史を文学、建築、彫刻、演劇や絵画芸術で保存しようとするならば、キルギス族は自分たちの思想や意識、民族の栄光と恥辱、自由と独立のために行った戦い及び民族の歴史と生活をすべて口承叙事詩の形式で展開するであろう」³⁾

英雄叙事詩の創作者、口頭伝承者はすべて各

時代のマナスチ (Manaschi) なのである⁴⁾。キルギス族の口頭伝承に対して、私たちは現場を通して天才的な民間歌手マナスチの伝承と語りを観察し、今日も依然としてその古い形態を保っている英雄叙事詩「マナス」の実演活動を通してその答えを探すほかないのである。

英雄叙事詩「マナス」が語っているのは、マナスとその7代の子孫の英雄的な業績を内容とする物語であり、讃えているのは彼らの英雄主義の精神である。この叙事詩は10世紀近く伝承されてきたが、19世紀後半期になってようやくロシアのカザフ軍人チョカン・ワリハーフ (喬坎・瓦里汗諾夫 C. Valikhanov)⁵⁾ とロシアのチュルク学者ラドロフ (V. V. Radlov)⁶⁾ が民間歌手の口頭から初めてテキストを記録した。それ以後、「マナス」は世界各国の学者と読者に知られるようになり、その研究は現在ではこのような国際的な学問に発展している。

今日までに、わが国の新疆ウイグル自治区及びキルギスタン、カザフスタン、アフガニスタンなどの国のキルギス族居住地域から採集した「マナス」の各種テキストは150種あまりになる⁷⁾。

キルギス族は口頭の形式でその歴史を保存してきた民族であり、叙事詩の伝承と発展に重要な貢献をした天才的なマナスチの名前をいちいち列挙することは不可能である。しかし、マナスと生活を共にし、英雄の勇士40人の一人となって、マナスの遠征につき従ったエルチ・ウウル (Irqi-Uul)⁸⁾、19世紀から20世紀に生存したキルギスタンのマナスチであるテニベク・ジャピ (特尼別克・加皮 Tinibek Japiy)⁹⁾、20世紀のマナスチであるサゲンバイ・オロズバク (薩恩拜・奥諾孜巴克 Sagimbay Orozbak)¹⁰⁾ とサヤクバイ・カラライエフ (薩雅克拜・卡拉卡拉耶夫 Sayakbay Karalayev)¹¹⁾、20世

紀に中国で生存したマナスチであるジュスパクン・アバイ (居素朴阿昆・阿帕依 Jüsüpakhun Apay)¹²⁾、イブライム・アクンベク (額布拉音・阿昆別克 Ibirayim Akhunbek)¹³⁾ とアシマト・マムベトジュスプ (艾什瑪特。瑪木別特居素普 Eshmat Mambetjüsüp)¹⁴⁾ など、多くのマナスチの名は歴史書に永遠に記載されるであろう。そして、当代のマナスチの中で、新疆アクチ県カラブラク郷メルケチ村に生まれ、国内外の学者から「現代のホメロス」、「生きているホメロス」と尊称されているジュスプ・ママイ (居素普・瑪瑪依 Jusup Mamay)¹⁵⁾ は疑いもなく最も傑出したマナスチの代表である。

口頭伝承を言語芸術の角度から見ると、「マナス」には少なくとも次のような三つの特徴がそなわっている。

- (1) 伝承の類型化構造 (主題と物語の類型を含む)、伝承の類型化句法と類型化語句¹⁶⁾
- (2) 「語りにおける創作」——口承叙事詩の創作、保存と伝播の唯一の有効な方式
- (3) 叙事詩創作の言語環境——マナスチと聴衆 (観衆) の相互関係及び彼らと叙事詩の口承テキストのあいだの関係

本文は「マナス」の類型化語句の特徴 (叙事詩の類型化句法の構成過程を十分に討議できなかったとしても)、歌手の実演及び実演の言語環境の分析を通して、この規模が大きな英雄叙事詩の最も基本的な特徴を検討するつもりである。

英雄叙事詩「マナス」の構造とその内容には、類型化という特色がそなわっている。類型化の構造にはたいへん強い機能がそなわっている。歌い手が叙事詩を創作する時に、このような機能は以下の二面において顕著な役割をはたしている。第1は、叙事詩の全体構造の構造面であ

る。第2は、叙事詩の内容の展開面である。

ロードの観点によれば、口頭伝承には多くの物語の類型が存在し、それらをめぐって作られた物語にはかなりの変化があるだけでなく、それらは重要な機能をそなえ巨大な活力を充満した要素として、口承説話のテキストの創作と伝播の中に存在するとのことである¹⁷⁾。

全体構造の面では、「マナス」と古代ギリシャの「イリヤード」、英国の「ベオウルフ」、フランスの「ローランの歌」、スペインの「エル・シードの歌」、ドイツの「ニーベルンゲンの歌」などヨーロッパの英雄叙事詩とは明らかに異なっている。これらヨーロッパの叙事詩は基本的には事件を構造の中心としているが、「マナス」は人物を構造の中心とした典型的な叙事詩である。それは基本的に主人公の英雄の出生から死亡までの人生の歩みをもとに物語を叙述している。わが国の著名な叙事詩研究者である郎櫻教授は多年の比較研究を経て、テュルク語系諸民族の叙事詩は叙事構造において以下のようなパターンを遵守していると指摘している。

英雄の特異な誕生——苦難の幼年時代——若くして功を立てる——妻を娶って一家をなす——外地への遠征——地下への進入（あるいは死んで復活する）——災いに遭う故郷——敵に殺される（あるいは篡奪者が懲らしめられる）——英雄の凱旋（あるいは犠牲）¹⁸⁾

このような叙述方式あるいは叙事詩の壮大な構造は、キルギスの口頭伝承において、「マナス」のように数代の英雄人物の事績を語った英雄叙事詩のグループに属するだけでなく、多くの叙事詩の作品にも属し、カザフ、ウイグル、ウズベク、トルクメン、カラカルパクなど他のテュルク語系諸民族に広く用いられている¹⁹⁾。

文字化された文学と異なる言語芸術の形式の

一種として、口承叙事詩の開放的な類型化語句の構造によって、語り手は語りの過程で古い口頭伝承から適当な語彙、モチーフあるいはテーマを自由に選びとって自分の語りの中に運用し、どのテーマも許される範囲内で拡大し整理して減らすことができる。これがロードの言う「限度内の変化の原則」でもある。語りにおいてテーマに対するこのような調整は伝承に由来するものであり、このために伝承の制約も受け、適度な変異の中で叙事詩全体の内容と構造の安定性を保っている。語り手は伝承の類型化構造の中でさまざまな叙事詩の材料を運用して物語を編む。語彙の類型と主題には一定限度の可変性をそなえているが、叙事詩の全体構造の枠組みは変わることがない。類型化語句の構造は英雄叙事詩「マナス」の最も安定した要素なのである。

類型化の句法はキルギスの口承叙事詩中で別のユニットとして、叙事詩の格律、韻律及び並列式を含んでいる。それは難度のかなり大きな需要から専門的に細かな分析を深めた作詩法の範疇に属している。その特殊性を考慮して、本文では討議しない。

口誦詩理論（あるいはパリ・ロード理論）によれば、程式（類型化語句）とは一組の単語あるいは連語、ロードの言う「大詞」(large word) に類似した特定のフレーズと連語が組み合わさった一篇の詩である。このような類型化語句は通常同じ格律の条件で運用され、相対的に安定した意味を表わしている。しかし、その重要な前提条件は、この類の類型化語句あるいは「大詞」は、特定のユニットとして、口承テキストの中に繰り返し出現し、叙事詩の歌い手の語りと実演のために便利な条件を提供しなければならないということである²⁰⁾。それには相対的に固定した韻律形式と形態がそなわり、

それは歌手集団が享受と伝承をし、語りのテキストの中に繰り返し出現する²¹⁾。

キルギス族の英雄叙事詩の長い伝統において、類型化語句はマナスチが叙事詩の主題、内容を記憶して語り、叙事詩の新たなテキストを創造するためにきわめて有効で便利な方法を提供するだけでなく、語りにおいて伝承の脈絡どおり以前の概念を別の新しい概念に関連させ、聴衆の思惟を導き、彼らの注意力を引く。例えば、「我らはこの一節を止め、マナスの身辺にもどらせたまえ……」、「我らはここで止めて、カラハンの子カニケイのようすは如何と……」などのように。

このような類型化語句は異なる言語環境のもとではマナスチたちが自由に融通をきかせて運用する。最も安定した語彙の類型とはそれらの表現の意味が最もよく見られる類型化語句なのである。英雄の名前、駿馬の名称、特殊な地名などが歌手の思惟を導き、叙事詩の歌手の創造を呼び起こす特殊な「メルクマール」となり、これらの「メルクマール」にそって、歌手たちは語りの中ですばやく自分の描く対象と関わる手がかりと情報を見つける。これら「メルクマール」の働きのもとで、英雄の風貌、性格、顔つき、表情、服装、忍耐強い意志の力、勇氣と胆力、超人的な力、そして乗馬用の馬、武器、各種の戦闘、対一の格闘、戦場の残酷さ、自然の景色とその他さまざまな自然の事物を表現する大量の類型化語句が繰り返し現れる²²⁾。

類型化語句の運用について、マナスチ自身の見方を聞いてみよう²³⁾。

ア **ディル・ジュマトゥルディ**（以下**ア**と略す）（語りにおいて）一人の英雄を述べなければならぬ時に、例えばアルマンベトが登場する際に、あなたがまず思い浮

かべるのは何でしょうか？²⁴⁾

ジュ **スプ・ママイ**（以下**ジュ**と略す）アルマンベトが登場する時に、わしが真っ先に思い浮かべるのは、彼の英雄的な事績だね。

ア どのように彼を描くのですか？

ジュ 先ずその外見を語る。例えば、「金色の顔は四方に光を放ち、ま白き顔には斑点もない。言葉つきは率直で曲がらず、アザズハンのアルマンベト……」というようにその顔つきを描く。その時、個別の言葉には変化や増加があるかもしれない。カニケイについて語る時には、次のような4行詩「汗王の娘カニケイ²⁵⁾、女人の中の美女、長髪の賢き人、女人の中の知恵者、広いスカートの中の純潔者²⁶⁾、女性の中の女王」があれば十分じゃ。

ア これらの固定的で形象的な詩句が各人物の基本的な性格の特徴を表現していますね。では、アイチュレクはどのように描きますか？

ジュ アイチュレクを語るには、「天空を飛翔し、金色の光を身にまとい、『彼女はとても美しい』、太陽と月も讃嘆の声をあげよう」というような詩句で、その美貌を讃え、太陽と月に彼女を讃える声をあげさせる。もしもこのように歌わなければ、アイチュレクの美しさを表わせないじゃろう²⁷⁾。

ア その他の英雄人物、バカイ、グリチョロにもこのように固定した描写の詩句はあるのですか？²⁸⁾

ジュ バカイについては、「銀白の長いひげはきらきらと輝き、並はずれた知恵の持ち主バカイ老人」と述べて、彼の言葉によってその抜きんできた知恵を表わす。ア

ルマンベトの性格に人びとが注目するのはその正直なことじゃ。彼は自分の故郷についてもあるがままに話して、少しも誇張や飾りが無い。

ア これらの英雄以外に、マナスの駿馬アクラ、彼の武器や装備などを描くのに固定した詩句もあるのですか？

ジュ そう、固定した詩句で語る。

ア あなたが語る時、どうやってこれらの詩句を思い出すのですか？

ジュ それらの詩句が自分でわしの口元に来てくる。例えばある勇士が戦場で必死に戦っている時、以前に歌った武器に関する詩句が自ずと舌先まで出てくるようなものじゃ。

ア では、あなたが最初に「マナス」を学んだ時、先ず覚えたのはこれらの固定した詩行ですか、それとも物語の内容ですか？

ジュ 先ず物語を覚えた。

ア それから？

ジュ 初めの言葉。

ア 初めの言葉とは何ですか？

ジュ 初めの言葉とは、マナス、アルマンベト、ケクチ、グリチョロのような英雄人物の名前じゃ。彼らがいつ、どこで出現しても、初めの言葉さえあれば物語を引き出すことができる。

ア つまりあなたが今しがた話された固定の詩句も引き出せると？

ジュ そうじゃ。それらが口元まで引き出せると、もしもこれらの言葉を飛び越えてしまうと、後の詩句を並べて語ることが難しくなり、まったく語ることができなくなる。わしが「マナス」を語るのもこのようなものじゃ。

このたびの対談で私たちは少なくとも次のような点を教えられるにちがいない。つまり、口頭の語りに対してすでに慣れているマナスチは聴衆に面して、語りの中で叙事詩を創作する時に、その脳中に十分な類型化語句を蓄えてさえいれば、彼は軽々と自分の使命を全うし、観衆の喝采を浴びることになる。これら固定して繰り返し現れる詩句が、類型化された語彙であり、疑いもなく歌手が叙事詩の内容に対し記憶する重要な手がかりであり、テーマの積み重なった重要な構成部分である。

この類の類型化語句は語りの全過程に満ちあふれ、数量が多く、形式は複雑で、それらに対し分類をしようとしても少しも意味はなく、徒労でもある。しかし、それら最も重要な表現形式の二種類をはっきりさせることは私たちにとってもきわめて重要なことである。

第1に、これら類型化語句は十分に古く、口頭伝承において数代の人たちに伝承され依然としてそれらの原始的な形態を保っている。語りにおいて、この類の類型化語句はどうしてもその原始的な状態で不変性を保たなければならない。それらは数量もきわめて多く、テキストで繰り返し使用される「雄々しき獅子マナス」、「アイコルマナス」、「勇士マナス」、「青ひげの狼マナス」、「アクン汗の娘アイチュレク」、「金色の月を縫い取りした赤色の戦旗」、「知恵あるバカイ」の類の類型化語句、及び以下のような数句の詩行で構成された類型化語句はいずれもこの類に属している。

Alten menen kumuxtun
Xiroosunon butkondoy.
Asman menen jeringdin
Tiroosunon butkondoy.
Ayingmenen kunongdun

Bir ozunun butkondoy.
Alde kaleng karajer
Manaska jerdingnen tutkondoy.

猶如金子和銀子
最精華的部分組成。
就像由支撐大地和天空的
擎天大柱組成。
像是太陽和月亮，
本身的光芒組成。
只有深厚的大地，
才能句多把瑪納斯支撐。

あたかも金と銀の
最も精華な部分で組み立てられるように
大地と天空を支え
天に聳える柱で組み立てられるように
あたかも太陽と月の
本体の光で組み立てられるように
厚い大地だけが
マナスを支えることができよう

もう一種の類型的語句は特定の意味を表わし相対的に固定した形態があるけれども、それらは異なる環境では多かれ少なかれ変異することができる。この類の類型的語句は大多数の状況においてすべて「大詞」の形態で出現し運用されている。

「マナス」の叙事構造、テーマ及び語句はいずれも類型化という特色をそなえ、叙事詩の外部構造全体は構造の規模がかなり大きな形式であり、叙事詩の内容と関係する内部の形式は語句と句法上の類型化となっている。類型的語句は束縛ではなく、血液のように叙事詩の伝承と語りの中に流れている。「語りにおける創作」では、「類型化語句は詩行の構成に用いられ、

常に韻律すなわち語法上の規則を遵守し、主題は歌手の速やかな創作の思考を導き、より大きな構造を組み立てる」²⁹⁾。

マナスチにとって、創作と語りは同一事物の二つの側面にすぎない。マナスチが観衆に面と向かって語りを行うのは、彼らが長らく脳中に蓄えていて、自分と観衆にとっても十分に熟知している類型的語句を引き出して叙事詩の内容を語り、生き生きとした眼ざし、豊かな顔つきと表情、手ぶり、身ぶりと変化のある韻律、音調で観衆の熱情を動かし、彼らが叙事詩をよりよく理解し鑑賞するように助けていることを意味している。つまり、叙事詩「マナス」の語りとは総合的な芸術の展開の過程であり、十分に複雑な芸術の表現形式なのである。このような語りの過程で、歌手と観衆は同時に叙事詩の創作に参加し、創作の中で各自の役割をはたし、このように互いに影響しあう関係の中で限らない喜びを見い出す。これこそが口承叙事詩の真の創作方式であり、「語りにおける創作」である。歌手が脳中に蓄えている伝承の類型化語句の数量が多ければ多いほど、内容が豊富になり、語りの中でその運用は思いのままになり、その語りはますます観衆の共鳴と喝采を引き起こし、観衆から賞賛され高く評価されるようになる。これが生きた形態の口承叙事詩の最も典型的な実演の場面なのである。

口承叙事詩の「マナス」について言えば、印刷されたテキストは生きている語りの形式の一種不完全な代用品にすぎない。このような代用品は叙事詩の筋を示しているだけであり、長い年月を叙事詩に付き添って口承叙事詩のテキストと密接に関係している物語の背後にある豊かで多彩な事物を含むことができない。例えば、私たちがジュズプ・ママイのテキストを印刷したテキストを読むことを通しても、叙事詩「マ

ナス」の詩句と物語を鑑賞できるにすぎない。この傑出した叙事詩の歌い手（マナスチ）の語りのように、すなわち彼の伝承の環境における「実演中の創作」を鑑賞できないのである。実演は口承叙事詩の生命であり、特定の環境のもとでの語りを通してでなければ口承叙事詩の本質を全面的に理解できないのである。

また、観衆の面前で「マナス」を語ることは、特定の環境において新たにこの叙事詩を創作する過程であり、古い口承叙事詩に対する伝承の再生でもある。「口頭伝承」は創作の過程に属するだけでなく、創作される作品そのものに属している³⁰⁾。英雄叙事詩「マナス」はキルギス族の口頭伝承の代表作であり、古い源泉に由来する口頭の情報であり、その創作過程とは一代ごとのマナスチが繰り返し語り、絶えず再生や再創作をし、観衆と互いに影響しあって口から耳に伝え、口頭の形式によってこれらの情報を伝承する過程なのである。このため、毎回の語りは叙事詩の発展の長い過程において、その時々特定の時間と環境における一度だけの語りであり、原始の交流が口頭の形式で発展した過程なのである。伝承に由来するけれども、「毎回の語りの性質はすべてそれが存在するすべての過程において位置が異なることによって区別が生じる」³¹⁾。

私たちは次のことを忘れてはならない。叙事詩の語りとは、これまですべて一方通行による情報伝達の過程ではない。叙事詩の歌い手と聴衆はすべて叙事詩の伝承の参加者である。「彼らは大量の『内部の知識』を共有していて、しかも大量できわめて複雑な交流と互いに影響しあう過程が存在している」³²⁾。マナスチについて言えば、この過程は自分の新しい叙事詩のヴァリエーションを創造し、自身の語りの才能を展示し、観衆に向かって自分の作品を伝え、

聴衆の中でその影響を拡大し、聴衆の賞賛を獲得する機会なのである。聴衆について言えば、これは彼らが各自の見方と審美感でもって叙事詩の創作に共に参加し、激しい情熱をもって再度この古い伝承を鑑賞する機会なのである。「毎回の語りとは一首の特定の歌であり、同時にまた一首のふつうの歌である。私たちが聞いている歌は『この一首の歌』であり、毎回の語りは一度だけの語りすぎないからである。しかも一度だけの再創作である」³³⁾。「マナス」の語りと伝承もこのような規律を遵守しているのである。

一首の特定の歌が、指しているのは一つの過程である。この過程では、歌い手の毎回の語りは、すべて伝承の基礎において、自身の能力と新しい収穫にもとづき、新しい環境のもとでありあわせの類型的語句を運用し、古い叙事詩のモチーフ、主題と構造に対し新たに詳しく見つめて適当な調整を行い、自分に属するテキストを創出する。実際に、歌い手にとっても聴衆にとっても、このような一度だけの語りは、伝承生活の中の一度の事件にすぎない。それは重複できず、絶対に始めから終わりまで再現し回想できないものである。「変異のモデルは細部の精練と彫琢、削除と簡略化、順序の改変と逆転、材料の添加と省略、主題の置換と交替、及び常に出現する結末の方式などを含んでいる」³⁴⁾。口承叙事詩の叙事は繁雑さと簡潔さがいりまじり、活発で開放的で複雑な体系であり、その中の変異は重大な筋の配列で発生し、修飾的な細部の描写方面でも発生する可能性がある。

ふつうの歌は、無数の演奏のあいだでさまざまな関連が存在し、毎回演奏されるテキストのあいだには、同じ伝承に由来する背景を共有している。「フォーリーの言葉によれば、『地図』

によって歌手と聴衆の双方が固定的な伝承の図式にそって、聴衆がとくに熟知している規程にそって、彼らがとくに発端と結末を知っている古い話を語っている³⁵⁾。どのみち、私たちはいつもキルギスの口承叙事詩の安定性に対して驚きを感じる。いつか、どこからか集めた叙事詩のテキストは、疑いもなくすべて共通の古い伝承の中から発展したもの、ある源泉から流れ出た谷川の水であり、同じ根から成長した大木なのである。このような安定性について、代々の聴衆と歌い手がすべて自分の貢献をはたしていたのである。

口頭の語りにおいて、語り手の身ぶり、語り手の技能の展開とテキストの構成は複雑で興味ある融合を形成している。私たちは語りのコンテキストを離れたならばどのようにして「マナス」の本質的な特徴を総括するかは想像することができない。

叙事詩研究の専門家郎櫻教授の観点によれば、口承叙事詩を研究する時、私たちは、本文、叙事詩の創造者と伝播者である歌い手（語り手）、聴衆、現実社会という四方面の要素に注目する必要がある³⁶⁾。私たちは叙事詩「マナス」の語りと創作の過程に対して完全で、的確で具体的に認識しようとするなら、まじめで詳細なフィールドワークの調査活動を通してその特定の環境における「実演（語り）中の創作」の状態を観察し、歌い手と聴衆の互いに影響しあう状態での実践を理解しなければならない。語りにおける口承テキストの芸術的な水準は語り手が蓄えている類型的語句の数量、生活の経験と伝承の知識に対する蓄積と直接的な関係がある。ラドロフは早くも19世紀末に、キルギス族のマナスチが聴衆に喜ばれるように努力して自己の語る内容を誇張し、聴衆の雰囲気によって自分の語りの感情を絶えず引き出し、聴

衆が自分の語りに溶け込ませようと努めている光景に注意していた。語りの中では、マナスチと聴衆のあいだの互いに影響しあう関係はすべて最も重要な有機的な活動の要素である。叙事詩の最も優秀なテキストとは、歌手と聴衆がいずれも興奮し、熱狂し、興奮した雰囲気において、歌手が才能を発揮するのに最もふさわしい環境のもとで、歌手と聴衆が互いに歩調を合わせる中でなければ生まれないのである。

要するに、「マナス」はキルギス族の長い口頭伝承の中で生まれた代表作である。類型化の構造、類型化語句、形式化のテキストはその典型的な外観である。「語りの中の創作」は叙事詩の創作方法だけでなく、この叙事詩を保存し伝播する手段なのである。

原 注

- 1) 叙事詩「マナス」の内容にもとづけば、叙事詩の最初の語り手は主人公の英雄マナスの勇士40人の一人——エルチ・ウウルである。彼の名前「エルチ」はキルギス語では歌手の意味である。叙事詩は長い発展の過程において、各時代のマナスチが繰り返す語りを経て絶えず成熟し完全となる。口承叙事詩の発生年代についての考証はたいへん複雑な課題である。ユネスコは各国学者の研究成果にもとづいて、1995年を叙事詩「マナス」の年と定め、キルギスタンの首都ビシケクで叙事詩誕生1000周年を記念する行事と国際的なシンポジウムを開催した。
- 2) チンギス・アイトマートフは1928年に生まれ、世界の文壇で著名な当代のキルギスタンの作家である。そのデビュー作「ジャミリヤ」は1958年に発表された。その後、前後して「白い帆船」、「さよなら、ギェルサリ」、「百年よりも長い一日」、「断頭台」などの名作を発表した。ユネスコの1997年の統計によれば、アイトマートフの作品は127種の言語に翻訳され、世界で最も読

【翻訳】英雄叙事詩「マナス」の特色

者の多い作家の一人である。その作品はほとんどすべて中国語に翻訳され、中国の読者にたいへん喜ばれている。

- 3) Aytmatov, 1995年, p. 15. 参照。
- 4) 「マナスチ」はキルギス語であり、専門に叙事詩「マナス」を語ることを職業とする民間の芸人を指している。
- 5) チョカン・ワリハーノフ(1835-1865)は最も早くに叙事詩「マナス」を採集した学者である。彼は1856年、1857年に数回キルギスタンのイシク湖と中国のイリ、テクスなどのキルギス族居住地で調査を進め、そこで「マナス」の「ココトイの祭典」3319行を記録した。
- 6) ラドロフ(1837-1918)は1862年と1869年にキルギス地域においてたいへん成果のあったフィールドワークを行い、「マナス」を含む大量の口承叙事詩を記録した。その中で、叙事詩「マナス」のテキストは第1部「マナス」全部の章及び第2部「セメテイ」あわせて12,454行を含んでいる。1885年、彼はこれらのテキストをその叢書「北方諸突厥語民族的民間文学典範」第5巻に収め、『卡拉—柯爾克孜(吉爾吉斯)的方言』(The Dialect of Kara—Kirghiz)と題してセント・ペテルブルグで出版した。
- 7) ス・阿里耶夫1995年、郎櫻1999年、曼別特1997年、阿地里2002年参照。
- 8) 叙事詩の各テキストには、エルチ・ウウルに関する内容がいずれもあり、彼は最初にマナスの英雄的な業績を歌にして語った人である。ジュズプ・ママイのテキストでは、エルチ・ウウルの身分について次のように述べている。マナスが大軍を率いて遠征し、契丹の首都ペイジンに攻め入り、後に敵の首領コングルバイの悪だくみに遭って、頭部を毒の斧で斬られ、アルマンベトの勧めで傷を治すためタラスにもどる。カザフの将領ケクチも敵に殺される。以下の詩行は全軍の統帥アルマンベトが各将領に各自の任務を強調し、彼らに別れを告げる場面を述べている。彼はマナスの勇士40人の一人エルチ・ウウルに語っている。

Uruxka irqi barbaghan,

Kalemdi kolgo karmaghen,
El unutup kalbasen,
Aykol Manas arbaghen.
Han Mamaydan berjaka,
Eldin gebin ukkanseng,
Aristan atka mingeli,
Birge jatip bir turup,
Uxul jaxka qikkanseng,
Oyronumdun jumuxun,
Unuptaxtap koybogun,
Jatsang—Tursang oylogun,
Kilbagande kildi dep,
Apirtip aysang bolbodong.
Men ozum kilgan ixterim,
Ak kagazga ixterim,
Arukeden surap al,
Irqim, sozgo ulap al.

額爾奇吾勒你不要參戰，
你要緊握你的筆杆，
英雄瑪納斯的英靈，
決不能被人們遺忘。
從汗王瑪瑪依至今的歷史，
你都曾親耳聽說。
自從雄獅跨馬登程，
你與他同吃同住緊緊相隨，
成長為今天這份年齡。
英雄的光輝業績，
你可不能有點滴的遺忘，
要時時刻刻回想思索。
他未干的事情，
你不必有意誇張渲染。
與我相關的業績，
早已被我記在紙上，
你可從阿茹凱手中索取，
把它也編入其中……

エルチ・ウウルよ、参戦しないでくれ
しっかりと筆を握らなければならない
英雄マナスの英靈は
決して人びとに忘れられない

汗王ママイの今までの歴史を
 そなたはすべてその耳で聞いた。
 獅子マナスが馬に跨り出発してから
 そなたは相よりそって共に食べ暮らし
 今日この年まで育ててきた
 英雄の輝かしい業績は
 少しも忘れることはできず
 時どきに思い起こす
 彼がまだしないことは
 わざわざ誇張するまでもない
 私に関わる業績は
 私とはとくに紙に記された
 そなたはアローケの手元から
 それをその中に入れてくれ……

- 9) テニベク・ジャビ (1846-1902) はキルギスタンのイシク湖畔に生まれ、その当時キルギス族のマナスチの中で最も傑出した代表的な人物であった。その語りは後代のマナスチに広く影響を与えた。20世紀で最も著名な数名のマナスチ、例えば中国のジュスパクン・アパイ、アシマト・マムベトジュズプ、キルギスタンのサゲンバイ・オロズバクはかつて共にその門下で学び、彼を師として叙事詩の語りの芸を数年学んだ。その叙事詩のテキスト第2部「セメタイ」の一部がかつて記録されて1898年と1925年にカザンとモスクワにおいて単行本の形で出版された。
- 10) サゲンバイ・オロズバク (1867-1930) はキルギスタンの著名なマナスチ。彼は叙事詩の前三部の内容を語る事ができ、濃厚な伝承の特色をそなえているが、さまざまな原因によって叙事詩第1部の内容だけが記録され、計180,378行を出版。
- 11) サヤクバイ・カラライエフ (1894-1971) は20世紀のマナスチの中でその語りの内容は最も長い。彼のテキストには、第1部「マナス」、第2部「セメタイ」、第3部「セイテク」及び第4部「ケナン」、第5部「アルムサルクとクランサルク」など、計500,533行。
- 12) ジュスパクン・アパイは1920年に死去。中国新疆のアクチ県に生まれた。かつて少年時代に

サゲンバイ・オロズバク、アシマト・マムベトジュズプなどと四方で名の知られた大マナスチのテニベク・ジャビを師として学んだ。1917年春に、彼はサゲンバイ・オロズバクと「マナス」の語りを比べ、その才能を示した。彼ら二人による叙事詩の語りの競争は美話として四方に伝わった。この期間にサゲンバイ・オロズバクは戦乱のためにキルギスタンからアクチ県に逃れた。彼が語った叙事詩前半の三部の内容はかつてジュズプ・ママイの兄バルワイが記録してジュズプ・ママイに伝え、後者のテキストの主な根拠となった。

- 13) イブライム・アクンベク (1882-1959) は中国新疆のアクチ県に生まれた。彼は民間で語ることが少なかった。ジュズプ・ママイ本人の話によれば、その兄バルワイがイブライム・アクンベクから記録した叙事詩第4部「ケネニム」、第5部「セイト」、第6部「アシルバチャーベクバチャ」、第7部「ソムビレク」、第8部「チグタイ」の内容を記録した。これらはジュズプ・ママイに伝えられ、ジュズプ・ママイは学んで吸収し、そのテキストの別の重要な根拠となった。
- 14) アシマト・マムベトジュズプ (1880-1963) は中国新疆のウチャ県に生まれた。彼は20世紀における中国のマナスチの代表的な人物であった。彼が語った叙事詩前半の三部「マナス」、「セメタイ」、「セイテク」の内容は1961年に記録され、郎櫻とユサインアジが漢語に訳したが、「文革」中に第1部の原始記録稿が失われ、第2部と第3部のキルギス語版は2003年にクズルスキルギス語出版社から、計11,070行が出版された。「マナス」以外に、キルギスの他の民間伝承叙事詩「エル・トシトゥク」、「鳥獣の王ブイダク」、「クルマンベク」、「ジャンシとジャイシ」などを語った。
- 15) ジュズプ・ママイは、1918年4月に生まれ、地元では広く知られていた。1961年より、中国の民俗学界から注目されるようになった。8歳より叙事詩の語りを覚え、10歳で叙事詩のすべてを掌握した。そのテキストは、「マナス」、「セメタイ」、「セイテク」、「ケネニム」、「サイト」、

【翻訳】英雄叙事詩「マナス」の特色

「アシルバチャーベクバチャ」, 「ソムビレク」, 「チグタイ」など八部, 232,200行を含んでいる。そのキルギス語版は1984年から1995年に新疆人民出版社から全18巻が出版された。「マナス」以外に, 「エル・トゥシトック」, 「クルマンベク」, 「バグシ」, 「トルトイ」など十数部のキルギス族の叙事詩を語り出版されている。

- 16) 「口頭程式理論 (口誦詩理論)」の創立者の一人アメリカの学者ロードは, 歌手が類型化されたテキストの形式で物語を語る時, 連語で構成された規模の小さい類型化語句以外に, 繰り返して使用される, 一組の意味で構成された叙述のユニット, 例えば集会, 宴会, 戦闘及び馬, 男女の主人公の描写があると, 考えている。キルギスの口頭伝承においてもこの類の主題が存在し, 南スラブ・クロチヤ人の叙事詩と似ている。これらの主題は基本的に同じ単語で叙述するが, 違う歌手が語る時には一定の伸縮性と差異がそなわっている。主題が含んでいる情報が大きければ大きいほどその変異性は大きく, その反対ならば相対的に安定する。ロードは, 口頭叙事詩には話型 (story pattern) が存在し, それをめぐって話の変形がどれだけあろうとも, それには偉大な生命力がそなわっていて, 口承の物語のテキストの創作は伝承の中で役割をはたすと, 考えている。例えば, ホメロスの叙事詩「オデッセウス」の話のモデルには五つの要素がある。別離, 遭難, 回帰, 報い, 婚礼。キルギス族の口頭伝承叙事詩の歌い手について言えば, 物語のモデルにはより規模の大きな内容をそなえていて, 絶対多数の口承叙事詩の作品はすべてこれらを遵守している。: 誕生, 苦難の幼年時代, 少年の功労, 婚姻, 出征, 死と蘇生 (地下への進入), 故郷の遭難, 回帰などの主題。
- 17) Lord 1960, 弗里1997, 尹2002参照。
- 18) 郎櫻1999, p 21参照。
- 19) Chdwick 1960, Reichl 1992参照。
- 20) 弗里1997を参照。
- 21) 朝戈金2000, p. 204参照。
- 22) Radlov 1885参照。第5巻のまえがきで, ラドロフはキルギス族の口頭叙事詩の語りの特徴,

例えば口頭伝承の叙述の記録, 即興的創作, 口頭伝承の基本的叙事のユニットすなわち決まり文句, 語りにおける聴衆の役割, 完全な話及びその組成部分の多重構造 (すなわち主題), 口頭詩作中の新旧の叙事要素の混雑 (語りと伝承), 叙事の前後の矛盾がそなえる意味, 現場の背景の歌手の創作に対する影響, 語りにおいて叙事にともなう韻律など後人にとって大いに教えられる役割をはたす見解を提出していた。

- 23) 2001年8月26日に本文著者がアクト州でフィールドワークを行い, ジュスプ・ママイ老人にしたインタビューにもとづいている。この時の対談はジュスプ・ママイの家で行われ, 対談はキルギス語で「キルギス文学」2002年第2期に発表された。
- 24) アルマンベトは「マナス」第1部の主要な登場人物の一人であり, 家庭内の争いで家を離れた契丹の王子である。先ず, カザフの汗王ケクチのもとに身を寄せ, 後にマナスのもとに行き, 彼と乳兄弟の誓いを結び, マナスの遠征に従って, 輝かしい戦功を立て, キルギスの人びとに崇拜される人物である。
- 25) カニケイは英雄マナスの知恵と勇気をそなえた妻であり, 有力な助手である。
- 26) 広いスカートは, 女性を指す。
- 27) アイチュレクは, マナスの息子の嫁。人と神のあいだに生まれた仙女で, 白鳥に変わって空を飛びまわることができ, 叙事詩第2部の主人公セメタイの妻である。
- 28) バカイは「マナス」第1部の主要な英雄である。グリチョロは叙事詩第2部の主要な英雄である。
- 29) 尹2002参照。
- 30)31) Vansina 1985, p. 3参照。
- 32) 朝戈金2000参照。
- 33) 弗里1997, p. 100参照
- 34) 弗里1997, p. 101参照。
- 35) 朝戈金2000, p. 243参照。
- 36) 郎櫻1999, p. 192参照。

参考文献

阿地里・居瑪吐爾地, 托汗・依薩克『当代荷馬「瑪

- 納斯」演唱大師居素普·瑪瑪依評伝』内蒙古大学出版社 2002年
- 其·阿里耶夫 (S. Aliv), 特·庫勒瑪托夫 (T·Kulmatov): 『瑪納斯奇与「瑪納斯」研究者』, 彼什凱克, 1995年
- Aitmatov, Chinggiz. "Beaming Height of Ancient Kirghiz Spirit", *Encyclopaedical of Epos 'Manas'*, Bishkek: Encyclopedia Press. 1995.
- Chadwick, Nora K. and Victor Zhirmunsky, *Oral Epics of Central Asia*, London: Cambridge University Press. 1960.
- 朝戈金: 『口頭史詩詩学: 再皮勒「江格爾」程式句法研究』, 南寧, 廣西人民出版社, 2000年.
- 約翰·邁爾斯·弗里: 「口頭程式理論: 口頭傳統研究概述」, 朝戈金訊, 「民族文学研究」1997年第2期
- 約翰·邁爾斯·弗里: 『口頭詩学: 帕里-洛德理論』, 朝戈金訊, 北京: 社会科学文献出版社, 2000年。
- 郎櫻: 『「瑪納斯」論』, 呼和浩特: 内蒙古大学出版社, 1999年。
- Lord Albert B. *The Singer of Tales*, Cambridge, Mass: Harvard Press. 1960.
- 曼拜特: 『「瑪納斯」史詩的多種變体及其說唱藝術』, 烏魯木齊: 新疆人民出版社, 1997年.
- Radlov, Vasilii V. *The Dialect of the Kara-Kirghiz*. Vol. 5 of *Example of Folk Literature of the Turkic Tribes*. St. Petersburg: Eggers und Schmitzdoff, 1885.
- Reichl, Karl. *Turkic Oral Epics Poetry: Traditions, Forms, Poetic structure*, New York & London: Garland Publishing, 1992.
- Vansina, Jan. *Oral Tradition As History*, Madison, Wisc.,: University of Wisconsin Press. 1985.
- 尹虎彬: 『古代經典与口頭傳統』, 北京: 中国社会科学出版社, 2002年。